



ボランティア活動から学んだこと

山東省・済南外国語学校 高1（女）

張 楚珺

その日は冷たい雨の日でした。この雨で少し気持ちが重たくなりました。私はボランティアとして、聴覚障害者と交流するために、福祉施設に歩いて入りました。そして同時に、あの耳の不自由な子供たちの世界にも入りました。

以前にも、私は何度かボランティア活動に参加したことがありますが、福祉施設は初めてです。私が想像していたボランティア活動とは、ただ私が弱者を助けるということだけでした。彼らから何かを教えられるわけがないと思っていました。しかし、今回のボランティアで私のそんな考えが変わりました。

福祉施設の門に入ると、廊下は長くて、雨で暗かったです。耳の不自由な子供たちに会うのは初めてです。彼らは毎日苦しくて、いつも表情がなくて、ぼかんとしてばかりいます。これは私が小さい頃から聴覚障害者に対してずっと抱いていた印象でした。一体、彼らの生活はどんな様子なのでしょう。私の心はだんだん声のない世界の恐怖やら、好奇心やらで溢れてきました。ためらいながら、先生について、ある教室に入りました。

その教室には子供がいませんでした。ただ、壁の前には彼らが描いた絵がきちんと並べて飾られていました。私は驚きました。なんとも素晴らしい作品ですね。激しい風にもまっすぐに伸びている竹だの、生命の熱情を燃やしている蓮だの、まるで生きているみたいな昔の美人だの。素敵な色の組み合わせや、器用に回している線は、私を深く陶醉させました。私はこれらの絵から作者の生活と生命に対する愛を見つけることができました。彼らの絵には愛が溢れています。でも、ふっと思いました。あの子供たち、彼らの生活は切なくて愛がないはずではありませんか。彼らはどうやってこんな素晴らしい絵を描いたのでしょうか。

そう思いながら、私はこの教室を出ました。先生は我々を隣の教室に案内しました。子供たちは授業していたものの、教室には声がありませんでした。拳を握り締

めて、私は教室に入りました。

彼らの声のない授業は我々によって中断されました。教壇の上で先生は手話を使って我々を紹介していました。私は教壇の下に座っている子供たちの顔を見つめていました。私は見ました。彼らの顔に苦しい表情を。私は見ました。あの子供たちが一生懸命に努力しても、言葉を言い出すことができない切ない様子を。私は見ました。彼らが手話で話す声のない交流を。彼らの生活はやっぱり私の想像どおり、希望がなさそうです。そう思って、悲しみが心に浮かんできました。私はなんと幸せです。神様はなんと不公平です。この子供たちはなんとかわいそうです。

先生が話を終えた後、私はある女の子に近づき、彼女との交流が始まりました。私は紙で自分の紹介を書いて、彼女に渡しました。彼女が私を理解してくれるかどうか、私を怖がるのではないか、私はドキドキしていました。うれしいことに、彼女は紙を収めて、顔に恥ずかしそうな微笑みを浮かべました。そして、紙に自分の名前を書いて、私に戻して、くれました。私がそれを見終わって、頭を上げると、彼女の暖かいまなざしが目に入りました。

「あなたは幸せなの？」私は書いて聞きました。

「はい、とっても。」彼女は答えました。そして、頭を上げて、両手を胸の前であてて、微笑んで私に頷いて見せました。そのまなざしは暖かくて、幸せで、この一生でも忘れることのできない美しさでした。

私はびっくりしました。彼女の返事が私が小さい頃からずっと考えてきたこととは全然違っていただけです。身体障害者の世界は暗くて、希望はなくて、幸せになるわけがない、暖かさを感じるわけがないとずっと思っていたからです。

「何で？」健全な私にはまだ幸せでない時があります。それなのに、彼女はなぜそんなに幸せなのですか。どうやって幸せになったのですか。

「私はね、小さい頃から描くことが大好きでした。でも、私は耳が聞こえなくて、親友に嫌われていました。親は私に絵画を専門的に勉強させるのも無理だと思っていました。だから、今福祉施設で絵画を学ぶ機会を得ただけで、満足です。そして、幸せです。」

この返事は私の心を震撼させました。そして、先ほどの教室の絵のことを思い出しました。あの中には彼女の絵もあるわけですね。彼女は生活と生命を愛している

はずです。だからあのような絵が描けるのです。

「夢は私に希望を与えてくれました。耳の不自由さを補ってくれました。夢を求めることができるだけで、私は幸せです。」彼女はまた書きました。そうです。彼女はもう障害がありません。彼女はもう私と同じ、健常者です。そして、私よりもっと偉大で、もっと幸せです。

最後に、私は準備したプレゼントを彼女に贈りました。でも、これは夢が彼女に与えたものよりもずいぶん小さな物ですね。元はボランティアとして参加した私ですが、彼らを本当に助けるものは何なのか、この子供たちから教わりました。

「頑張ってください！」私は紙にそう書いて、彼女に渡し、手を振り、別れを告げてから、教室を出ました。

私は廊下を歩きながら考えました。外の雨は激しくなったようですが、私の気持ちはもう重たくはありませんでした。夢はすてきな物ですね。耳の不自由な人に力を与えました。夢のおかげで、彼らは懸命に頑張って、幸せな生活ができました。私も夢を持っていますよね。私も夢のために努力したいです！ 私も彼らと同じ、充実した、幸せな生活を得たいです！ やる気、自信、信念、これらは彼らが私に与えてくれた物です。本当に大切なことを学ぶことができました。

この後、私は困難に遭うたびに、夢と彼女、そしてその時のボランティアのことを思い出します。心は夢、信念でいっぱいです。

さあ、私も自身の心に「頑張ってください！」と声をかけながら一步一步進んで行きましょう！